



## 夏休みの会話

園長 山中 文

夏休み中は、暑い暑い日が続きました。みなさま、上手に盛夏を乗り切られましたでしょうか？

夏休みのお休みの日に、素敵な父子2組と出会いました。

1組目は、信州の美術館に行った時のことです。その美術館は、広い原っぱや遊歩道があったり、ビオトープがあったりしていて、なかなか素敵なおとこです。チケットを購入すると、1日中出入り自由でしたから、人々は、美術館を楽しんだり、散策したりと、思いおもいに過ごしていました。

ちょうど、私も、散策して、原っぱ側から美術館に戻ろうとした時のことです。

私の横をちょうど年長さんくらいの男の子とおとうさんが手をつないで歩いていました。ちょうど美術館近くになった時、前方に、入館時に配られるパンフレットが1枚、捨てられたかのように落ちているのが見えました。それを見た男の子が、おとうさんに「何か落ちてる」と言いました。おとうさんが、「そうだね」と応えると、子どもが「捨てたのかな？」と続けます。そこで、おとうさんが、とても優しい声で、「誰かが間違えて落としたのかな。でも、このままだとゴミになるね」と言ったのです。こうして、父子は、そのパンフレットを拾って、美術館入り口に向かいました。

その後の行き先が私とは異なったので、その父子が、そのパンフレットをどうしたのかは定かではありません。でも、その会話で、とてもふわっとした気持ちになりました。

パンフレットは、美術館から原っぱに出た人が捨てたものだったかもしれません。でも、そのおとうさんは、捨てたとは決め付けず、「このままだとゴミになる」という部分で話をしていました。それは、ゴミを落とした人（あるいは捨てた人）を責めるのではない姿勢です。それよりも、落ちているものを自分たちの行動の問題としてどう考えたらいいか、というところに子どもの思考を持っていく力のあることばだと思いました。

もう1組は、ホテルでの親子です。そのホテルでは、夜、親子向けに縁日や炉端で冷やし野菜をあてに一杯という催しを行っていました。炉端で何気なく見ていると、斜め前に縁日でお面を当てた男の子とおとうさんがいました。「そろそろ（部屋に）帰ろうか」とおとうさんが言うと、男の子が、甘えるでもなく拗ねるでもなく、「抱っこ」と可愛らしく言いました。おとうさんもごく自然に「うん」と言ってその子どもを抱き、子どもは誇らしげにおとうさんの首に手をまわして、あたりを見てお話をしながら帰っていきました。

「抱っこ」をせがむ子どもの様子はよく見ますが、ここでは、帰るのに駄々をこねるわけでもなく、帰る交換条件のようにせがむのでもなく、激しく甘えるわけでもありませんでした。「帰ろ」・「抱っこ」がごく自然に出てきていて、父子の日頃の信頼関係が見えるようでした。

夏休み中、ご家族では、どんな会話や触れ合いがありましたか？

ちょっとしたこと、何気ない会話でいいのです。それらは子どもたちの成長への財産となり、心の拠り所をつくります。目を見て、手をつないで、体を触れ合って、一言二言会話する一そんな時間を大切にしたいものです。

